

## 演習形式授業における歴史史料講読の実践

社会科教育専修・矢澤知行

### 1. 授業の概要

「社会科研究演習」は社会科教育専修に属する学生を主対象とした演習形式の授業科目である。制度上は必修・選択必修科目ではないが、社会科教育専修の学生は1回生後学期から3回生前学期にかけてこの授業計4コマを重複履修することが強く奨められており（いわゆる“ウラ必修”）、連続する2学年が合同で受講する形式をとっている（前学期は2回生と3回生、後学期は1回生と2回生）。

授業の担当は、社会科教育講座の教科専門領域（地理学・歴史学・経済学・哲学・社会学等）の教員が学期ごとに2名ずつチームを組み、ローテーション形式で行っている。本報告で取り上げる2010年度前学期の授業は、森貴子氏（西洋史学）と筆者（東洋史学）の2名が担当した。受講生は計22名で、所属はいずれも社会科教育専修、学年別の内訳は、2回生10名、3回生12名であった。

本報告では、社会科教育専修の教科専門領域に関わる基幹科目ともいえる「社会科研究演習」について、授業実践上留意した点や授業評価の結果などについて述べていきたい。

授業の内容は、今回の担当教員がたまたま両名とも歴史学を専門としていたため、歴史史料の講読を軸に据えて行うことにした。具体的には次のようなものである。

まず、担当教員が、西洋・東洋の中世史に関する多様な歴史史料（史料の原文と現代日本語訳、1史料あたりA4版×1~2頁程度、計10点）を準備し、初回講義時に配布した。受講生は、それらの中から興味を持った史料を1点選択し（あるいは受講生自身が独自に史料を探してくることも可）、各史料について2~3名のグループを形成した。毎授業時、1グループが、各々選択した史料について、レジュメを用いて（グループによってはパワーポイントも使用）

報告を行った。その内容をふまえて質疑応答と討議を行い、授業終了時に担当教員がコメントを發して総括するという形式をとった。

事前に提示したシラバスには、授業の目標として、「日本および世界の今日的な出来事、社会的問題、あるいはそれらを取り扱う中学・社会（歴史的分野）、高校・歴史（とりわけ世界史）の授業内容についての理解を深める」という総論的な観点を掲載した。しかし、本授業の直截的なねらいは、歴史学という学問が史料の講読と分析によって成立していることを受講生が認識するとともに、中学・高校における歴史分野の「暗記科目」としての側面を相対化させることにあった。

それゆえ、授業実践にあたっては、受講生による史料講読の「質」にとりわけ配慮した。すなわち、史料を表面的に読むのではなく、各史料が、誰によって／なぜ／どのような状況のもとで作成され、どのように機能したのか、といった諸点に踏み込んで読むことを求めた。また、各回の報告者には、史料の中から受講生全員で討議できるような論点を掘り起こして提示することを課した。一連の過程を通じて、受講生が歴史学の基本的な営為を理解するという到達目標を立てて臨んだのである。

### 2. アンケートの実施と質問項目

本報告を作成するにあたり、「授業改善のためのアンケート」を実施した。全15回の授業の最終回にあたる2010年7月23日にアンケート用紙を配布し、回収した。

アンケートの質問項目は下記の8点であり、いずれも5段階評価による調査を行った。また、授業に対する感想や具体的な要望を記入するようための自由記述欄も設けた。

質問項目

①【あなたの意欲】この授業に積極的に

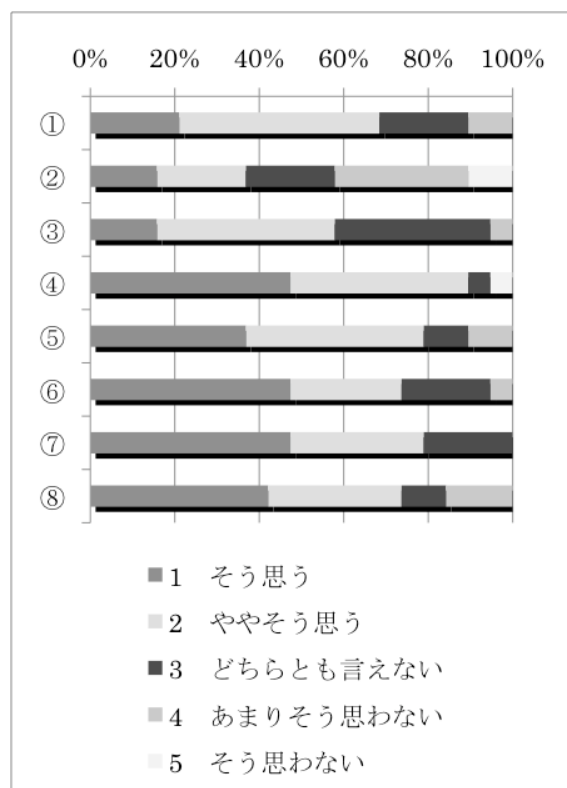
取り組んだ。

- ②【シラバスの利用】授業の受講に先立ち、シラバスを読んだ。
- ③【シラバス通りの授業】授業はシラバス通りに行われた。
- ④【関心・興味】この授業で取り上げられた事柄について、関心・興味がわいた。
- ⑤【有用性】授業内容は自分の将来の進路、人生にとって役立つと思う。
- ⑥【教員の意欲・熱意】教員の授業に対する意欲・熱意を感じた。
- ⑦【満足度】本授業は全体として満足していくものだった。
- ⑧【おすすめ度】本授業の受講を他の学生や後輩にすすめたい。

### 3. アンケートの結果

アンケート用紙は受講生全員に配布し、19件の有効回答を得ることができた。アンケート結果を整理したのが次のグラフである。

社会科研究演習 アンケート結果



### 4. 反省点と今後の課題

アンケートを通じていくつかの反省点が

浮き彫りになった。

とくに、授業への参加意欲・関心・興味に関する項目①④や、満足度・おすすめ度に関する項目⑦⑧において、否定的な評価を示した受講生が一定数いた点には注意を払う必要がある。

その要因の一つとして、受講生の当事者意識をうまく喚起できなかったという点が挙げられよう。毎回の授業時、史料講読担当者は報告に意を注いでいたが、それ以外の受講生たちは集中して質疑応答や討議に加わっていたとはいいがたい状況だった。アンケートの自由記述欄にも、“もっと自分自身、この講義に集中して質問を積極的にしていけばよかった”というコメントがみられた。受講生からの質問や意見をうまく引き出し、積極的に討議に参加させるためには、さまざまな配慮や工夫が必要である。今回の授業では、受講生の自主性・積極性を育てることを意図して、司会進行を学生に委ねるなど、担当教員は一步引いた姿勢で臨んでいた。しかし、上述の観点から、担当教員が積極的に議論を牽引するなど、改善を図ったほうがよいのかもしれない。

また、自由記述欄に、“教師になったときに教材の一部として使えるものがあってよかった。”、“基礎知識が足りないと痛感させられた授業であった。”といったコメントが見られた。これらは、授業に対する肯定的な評価ではあるが、担当者が本来意図するねらいからは乖離したものといえる。歴史史料を講読することの意義について、担当者の真意が受講生に十分に伝わっていなかったことを示している。

そもそも初等教員養成を基本とする現行の社会科教育専修のカリキュラムにおいて、今回のような教科専門領域に位置する歴史学の授業実践が成り立ちうるのか、成り立つとすれば、そのパズルのピースをどの位置に／どのようにして嵌め入れればよいのか。模索すべき点は多い。今後の課題としたい。